

魯國日本交通史
木名北邊探幸三

洋学文庫
文庫 8
A 50
3





北邊探事補遺附言

大槻文庫

丙寅の冬、俄羅斯漂民紀聞編集の際、其國事機
密をめぐらんとす。其を撰へて別々北邊探事と
之つ書二卷を、因破入られたり。其條子於
て竊と稱し、紙を二張といふもの成抄し、補
録を付し、丁卯の春、赤人同巻といふ秘冊を
布政司より、其の亦、麾下の士、某等、人天、明年、丙
午の年、常規、其士、たつと、地、以、其、探、事、地、を、巡
檢し

久米虎江が海狗をとり、その他、近來、在、留

すし赤人ノ遊近せし問答書より取つてあれは
謬しふ是亦頗る彼至方位風俗人情を知らず是
れ等の書たり但し凡俗に裁せしごとく其人の通
詞あるふあるれを彼以互にを念なりうさる多
しと咄由致し撰述不文よりて書あり尤長卒々
不鮮しうさるめきもの少うん又撰者固トよ
り彼地方と事情とを弁おせざるやを推しそ
りしるちもろちんかちの半たと思はる本書
本傳寫と強しきものと尼西を名んるくを寫せし
此譯も阿の會し書語行傳名去のありしうて

ハコ多クは誤少ありんともゆるこ然れも此
の紀多かりともいふ多岐さハ感ざる所を
編み條下彼人あり情の一場を知りぬ微差なきふ
も阿の久あれをを距るも二十餘年の事なり
以時既に彼者此地より往來する台阿の事
とるも然る阿の事なりよつて一本
寫して撰むれ補遺とありんともゆるこ然れも
條下條々間しを條件と○○を記しむ文理屬
せざるありしを本意を存して其文脈を信する
はせるも阿の且其雙つてあるの及つて所あり

高木傳は愚拙を併し又門下未だる者と録りて
徳伝と増補訂正せしむたりこれに以て抄録と併
せ録んて之を後と知るべし又且て書澤氏徳伝
と并合する事多しこれを編修して読解する事
のむ少かり依て徳伝にて補遺の一とん

一 林氏伝は実上氏所著たるが徳伝よりそのあり
今に比るべし程感はる半多し亦これに通覧年よ
り抄録して傍補訂正を加へる事を知りの一助と
す

一 近江守重の邊要分界圖考といふ撰書ありこれ

彼家の秘蔵あり傳へ東西概史の分界を明後せ
るものあり 明後氏を享和多分 為實前集中は採
録せる者問と傍す傳録して姑く疑を闕くとの
多し今此書は後人高宮とて著しるを確證を
得る者多し亦これを抄録して前後を明し
又其條件中 為實聞との及庵との徳伝を附説
傍注をなせりこれよりして不覚して三まねを
なせし一説の書ともうたり但抄録感の口は
此と似れはし附する所の愚拙の致は我回念の
る事なふ重複をなすもの少かりて且て刪定を

んハ何々庵の如く然れども此れ元ト本務の餘暇
或ハ施治師或ハ官舎其閑を偷んて為る亦再ハ
校訂の違つた長ク疎漫の死遊る可くする所
あり係を諸書ニ於てを皆是れ其との秘韞たり
茂實偶々是を採りて之を以て忘劇の條これと
抄録

公家の一徳を多急速よせんと欲してあり高よ
同案藤永國と係り幸ひよそ道を行つて結定り
て是上をぬるとなりぬ今我隣境とありたる俄
羅斯屋の如く我侯封内沿海の地ハ是を

近ハこれを往て河の如く是君愛萌動をさすありしが
如き預め彼を知りて此は待川の用意ともなりふ
んと思ハハ此れ臣等が國恩を辱めざるの愚衷
ありて鄭重を願はざる所歟なり

丁卯の春

船水大槻茂實

赤人問答序例

撰者無姓名

一 魯西亞の屬國「イルクツコイ」ヲホーワカ等の夫方
 言ハフウレシイ「シヤモ」トハ松前の俗語「赤人
 と呼ぶるものなり」フウレシイ「シヤモ」ハ二言あり
 フウレシイ「シヤモ」ハ人ト云我なり
 按「これハ我ヲ呼ぶ人の稱なり」イルクツコ
 イ等の辭「能クフウレシイ」ハ赤色ニシヤモ
 ハ人ナリ我ヲ更ニ云ふべし
 其五人西神白々毛髪薄く赤ニなりく白髪服中



心を通せしむられし大抵我理あかき如く
とくも入地あるのみ夷人の欲しき等閑の旨
越通しつゝあれ夷人通詞も盲まれば此方此
つづり吾はさしをを以て通弁のみまれば万事
不便あり志のふるを^連れし者の内は宗上徳
内といふもの少く心解り交河して相尋ね
つゝつづりしきあはれ者として私しく懇懐せしめ
てその情切せり

一彼異密等朝夕の言をりを始めおあふ自由ある所
おあふの銀米を酒物等の款苗用のあつて興く

きせりお彼等を海とてと海舟を若きりきとよ
と漂流人とするも概念を始りあつて制度のあ
はれなればとていれをけしともは若きりあはれ
りてを来りし秘録を夷地の因エトロフとては誠意
をう食料も高用の不ともおあをきり相成る急を
款の因あといふ夷人への援助をあげばはるの如
と清き居り若のきし金等々をえんか先して彼者
は出云をハあひしうさふ振子なり且日本人
小親しく面福をハ安堵の款をえんる事あり
は打とけし秘録は方よりし其あめ物會がる

色鄙ありとも 山仁徳の輝光を以て接育したる
ありに徳字流年の波身ハ別注に載せしれど
小淺しおこし

一國凡そよきよき産物の所或ハ天文地理曆算の大
意を録めその抄位字ハ形を以て尋問し及んけ
る小若其人の性世智か かく其理もよくわら
れしに徳ハ核より通司の由あるを以て通する
かちあるれとも日く世訓もふ徳いおよあそく
事あふ世間言も多き意趣ゆる解さし大略河原
院人の徳後を録の風流さし符合も多き多し

れを偽りしあるも 但物感造勢も少しといひ
ろくしき質を以てくも徳を以て我れも僅し耳
るれが是しともそのゆく辯解も多し知れず
且概其ハ文字なく詞もりの語も其意味深
るありしとも其理解しつゝ馬あするふい
てハ決る弁も其字ハ推量の抄位のと多し其意あ
り誤りあると遠い末しあし 其抄身一書ハ編
集きんともあし書き綴らふむとも其文語を
字と多しあしなりあれ其以て對尋問の始終
に其たよやみあし布意なく以少冊とせし

るふいたるぬ

一但通事なきも万分の一を不用無しと
愼むは皆其行爲のさくふ用の少は多き
も其さくふも我黨の心底を其用のさく
ふれを不用をさくふ用のさく省くと
も其さくふ用さく用のさくふを其用
の我理を其さくふと知りしを其用
を其用しぬよつて其大略を其用
例なきこととす

于時天保六年丙午秋八月

赤人問答

茂質按本編問答を以て題名の略載を
あさぐ毎條問を起さる如き或ハ答を以て
おぼしめし其れを答とす所のあさぐ
多る己の信原の記を其れを其れとす
其條通件とすべく其れを其れとす
尚ほ其れ問に其れを其れとす
其れを其れとす其れを其れとす
其れを其れとす其れを其れとす
其れを其れとす其れを其れとす

一 佛法のいふるよりやと問ふ善趣と宗門教
流ある事ふをゆゑに宗名もつゞけられざる信
を所の極言の唯日月のさきより相列記よ
せふ図画中種々の画像ありて之を謂はれる事
凡そ其のふちを分るるに大畧を記す

永梅は魯西亜國日月ヲ專ら祭ルヤ否ヤヲ知ラス
西洋書中説ル所ヲ按スルニ改選巴洲中古昔ハ
日月ヲ神トシ祭ルコトアリ日ノ神ヲ「アポソ
ロト」云月ノ神ヲ「チアサト」云此余五星及種々天部

ノ神ヲ祭シナリ今ハ然ラス今時モ日月ヲ祭ル
モノハ韃靼ノ内及「亞弗利加」^{アフリカ}「亞墨利加」^{アメリカ}西洲中
間々コレアリトイフ

一 仏祖の名ふ婆素といひある事一 佛經凡俗の
時そ是の名ハ知母の名「マテリ」^{マテリ}といふは婦
人夢ニ神と通して懐妊一子を生む是れ佛經
あり釋迦の法を弘めたるが如く婆素の如く
高麗百昧の俗を教化して惡業の爲に種々の苦
難を遭ひ画圖する事なくちある行を以て打身ら
れ多し其を佛神といふ苦一ともあそむる母

敬きるゆへに^母母の姿を極むるも^{未詳}又入れば別
異俗を導く爲の方使るるやと示して果ては上天
してこそ仏教を教へんせむるが図の如し

按て漂浪人の語を并合し且本編に抄録を以
て「対治邪執論」の抄録後前 梓生島漂浪記 半天連紀
少の説と合して仏祖といふは「耶蘇契利斯督」は
るべし「ホ、マテリ」ハ漂浪のいふ「ホーホマテリ」ハ
して聖母と云ふ那より譯するものあるは彼土ハ
一向の天主教なること 説説と合す

彼土よりハ日天の象を多ふかごう 双羽者と画す

多の國字ありが在の仏祖なるといふ

一宗門の流風俗を尋ふるは極きて 毛袖の衣と云
ふ

按てこれを信徒のするのみならず 志うれを漂浪
の徒も今も本編に記す所を併せるるべし
其大根を尋ふるは我土修羅^驗の風俗に似たり
ハ如來の如きことと云ふ

一別縁と云せる十文字の形なるものハ佛祖の形と
畧しうねるものより 志れを懐中し給極るるは
教を尋ふるは又佛に尋ふるは又その外ハ大根の大なる

那柱をうらぐ世にむすふはたれおとすはた

按 傳是所の説と合さず多まざる信する所は
とて十字をうらぐはたれおとすはた

一此の在りて是る人其日の酒をきくは天
台宗の初めきくは形なり句よりもあるに二
人より唱へたる調子ありてさうたけりて經文
をうらぐはたれおとすはたはた等しく
厚紙より四面指のすはたは四枚隔り佛の画像
あり表紙はたけりてはた天移紙をうせ七か三寸
程幅のすはたはたはたはたはたはた

一右のいふ角柱ありて修りたるありはたれおとすはた

をうらぐはたれおとすはたはたはたはたはた
有狗より四角ありて是をたれおとすはたはた
るるもはたれおとすはたはたはたはた

按はたれおのすはたはたの話を合さしはた
方、自らうすきをうらぐはたはたはたはたはた

一説はのすはたはたはたはたはたはたはたはたはた
の内報りともはたはたはたはたはたはたはたはた

此はたはたはたはたはたはたはたはたはたはたはた
ヲ祈ルルハナシト見エ符咒の形西洋書ル見エ

ル「アレヒコレハ左道」和蘭語「ハ」ベイケロー教ニテ
ハ用サル「ト見ユ」トニテ真ノ
ニ字本文ナレシ

一葬礼ハ樂ヲ奏シ禮送送りの式あり大抵日本
右の風俗の如くは、（以下省略）

漂客の話と合を

一右ハ「ハ」と易卦と「ハ」振の事ハ「ハ」相子の
筋を「ハ」るも「ハ」る「ハ」イジユヨ」と「ハ」者子と筋
を「ハ」る事を知り「ハ」や「ハ」人と相「ハ」た「ハ」を「ハ」る
「ハ」按ニ西洋ハ右の一種和蘭ニテハ「ハ」ホールセツケル

ト云フモノアリコレハ鳥ノ飛ヲ見テ吉凶ヲ知ルノ
術ニテ右ヘニハ西洋地方多ク行ハレタリト云
コレ梅花心易ニ云風覺鳥ノ右ノ類ナラニ易卦
ハ彼ニ傳ハルベキヤウナシ又星ヲ觀テ右フ法
アリコレヲ「アストロ、ジヤ」ト云其中ニ二種ヲ分
ツ和蘭書ヲ攷フルニ其一ヲ「ナセール」レキト
イフコレ天然ノ義ニメ星氣ヲ察メ年ノ豊凶
ヲ知リ耕織等スベテ人事ニ益アル「ハ」ヲ考フ
ルノ術ナリ其一ヲ「ベイケロー」ヒケト云コレハ
左道ノ義ニシテ星氣ヲ察メ人ノ吉凶ヲ言フ術

ナリ此術亦古ヘノ世ニハ行ナハレシ由昔シ星象
ノ學士羅馬ノトドミチアリス帝ノ暴虐ナル七
日ノ後刀劍ニ死センコトヲ知リ又己レカ屍ヲ
犬ノ食フコトヲ知ル又子口帝ノ生ル時其女星
象ノ士シ問テ子口後必ス宝位ニ登テ母ヲ害シ其
後遂ニ終ヲ全ウセサルコトヲ知又厄カ勒レ祭シ亞エノ星
象ノ士其帝「アナスタシウス」カ雷ニ撃ルコトヲ知ル
等ノ類彼古書ニ多ク見ユ然レ氏其モト左道虚
妄ノ事ナルヲ以テ今ハ廢メ用ルコト少レナリトイ
フ

人相ハ「ヒシオニヨミア」ト云專ラ人面ノ中ニテ
額ヲ相スルコトヲ主トス又手ヲ相スルヲト

イフ近古ノ賢哲「ジュリウス」スカアリケル
文武醫藥天地窮理ノ諸學ヲ究メ兼テ人相ノ
學ヲ極ムト云フコト見エタレハコレハ占トノ類多

ク言ヘハ多ク虚誕ニハアラサルベシ

一急西亜の教法善く徳教の流布して拂帝察學
下位作把里斯とて教の堂塔を建立し
ふより以て其名ハ教法ハハルカ今急西亜の
法は均依して治す之と我々教法ハハルカ

ほろめらるるやんと尋ね問ふよりくも新志を
らん唯古代の形法盛に知られりき古尚代に法
を傳へたるなり

一法新志より以て家門を傳へて家系を精舎を勅
許し魯西亜より門徒を餘人を傳へ侍りて
本年十二月新禧の大祭會を執りしるより以て祭
事とコフラーツニカレといふ

亦按コフラーツニカハ和蘭ノ書ニコフラーツニキ
ニ作ル魯西亜ノ大祭日ノ名ナリ昔シ國都ゴモ
スクロノ大鐘未夕地ニ墜ズシテ宝塔上ニ懸

ケアリシ時此祭礼ノ日ニハコレヲ鳴ラシタリトイヘ
リ

- 一諸國の神仏を祭礼を多沙法をいふ
 - 一アルメニヤ國 大の政を神を祭るも悪法也といふ
 - 一ハホメーテ國 前子あり
 - 一エリイホ國 極東のめく山川木石何よりなるもの
を祭る事ありて其日天を
祭る事ありて其日天を
 - 一應帝亞 金佛木佛等を祭る日天を
祭る事ありて其日天を
 - 一アラビヤ 伊ニテヤ子似る事ありて其日天を
 - 一バリーシ國 日天を祭る事ありて其日天を
- 亦按ニアルメニアハ「アルメニア」ある一「亞爾墨

尼^ニ豆^ア教ハ其モト「厄^カ勒^レ祭^シ亞^アノ教ヨリ出タルモノ
ニテ魯西亞トハ同宗別派ナリ

「ハホメーテ」ハ「マホメツテ」ナルベシ「マホメツテ」ハ
又「モハムメツト」共云フ漢ニ馬哈默又、謨罕蓋
德共訳スコレ中古亞刺比亞ノ内、默伽ノ人建
タル道教ナリコノ法諸國ニ弘レリトイフ漢
ニハコレヲ回々教トイフ其教天ヲ祭ルヲ次テ
主トメ像ヲ設ケス礼拝寺アリテ時ヲ次テコ
レニ詣テ天ヲ拜スルトイフ
應^イ帝^シ亞^アハ今時ハ「回々」浮屠^{フツドカ}並ニ行ハル然レモ其

總國都大莫^モ卧^ゴ兒^ルトイフ地ニハ專ラ回々教ヲ奉
スルニヨツテ、回々最盛ナリ又西洋及聖^カ多^ク默^ク
ノ教亦流行ス

エリイホ 未詳
アラビヤハ 悉ク回々教ヲ奉ズルナリ
ハリイシハ 拂郎察ノ都 把理斯ナルベシ

一 清朝 画像木像を考む斗よはる日天を
一 コニスタンノホリ サリハラタ イールサリム
此等のふく皆魯西亞ノ佛法とおぼし唯^イ教^キノ違^ヒ

みとる

永按ニコンスタンノホリハ「コンスタンシノホリ」ナ
リコレ昔厄^カ勒^レ發^シ要^アノ都ニメ魯西亞ノ教由テ
起ル所ナリトイフ

サ一リハ「フタ」未詳

イ一ルサリムハ如^註德^テ亞^アノ都「ユサレム」ナル

シコレハ魯西亞ノ教ニ似テ別宗ナリ

○經文と唱ふるる差別

ヲホツ。ホリ。ホミロイ。魯齊亞の音

キリ且レ一ソシ「イルリユリム」の音

按如德亞ノ都
ユサレム

右の經文譯を凡ハ我理ハ同念をうといふ

按ふて遠近の音をうといふ

一 釋氏佛法の如く極楽地獄といふ方便の沙汰も

毎

一 前よりして多上人おのり仏書の内「ホホマテリ」とい
ふハ「神祇の母」とも「縁」とも「地」の圖をもちた
るにありて外種との象をありしる思画アそれ
とも悉くハ「教」とも「問」も「答」も「別」も「怪」も「号」も
「足」も「文」も「字」も「核」も「字」も「續」も「凡」も「唯」も
「意」も「三」も「成」も「法」も「亦」も「なり」

一名西亜の都の事を尋るふ帝紀を「ムスク」云と云

按「ムスク」は「ムスク」ある一、あれ旧都「ムスク」を本都とする所
の新都「ムスク」フルカト「ムスク」又「ムスク」フルカト「ムスク」

當時ハ女帝とて名を「イカテリナ」アリキセイウナと云

風説考ハカタハリイナテウと有り女帝とあり

又カタリナとし女帝とありカタハリイナを中

略して云時ハカタリナとしても通せんハ疑くハ

一人別名ハカタリナカタハリイナ何れも婦人

なりとも後世の世史書「書籍」の名も遠く

なるは「イカテリナ」依て後の考のなるハ

此「イカテリナ」は「イカテリナ」
何人の名を所ク

亡君ベアータウアリセイジエ年八十六歳で崩す
即「ペーテル」ヘイトルイジエの男おろ母ハ「イリサベツ
ト」ロウナと云

風説考ハ「イリサベツト」あり「ペーテル」ゴロートの
女也とあり「イリサベツト」の事ハ「イリ
ト」ペアータウハ「ペーテル」子也としハ「イリ
考」の「イリサベツト」ペーテルの子ハ「イリサベツト」
於「イリサベツト」を「イリサベツト」ともいへとも通せん
組ハ「イリサベツト」ハ「イリサベツト」を「イリサベツト」

イカテリナ。アリキセイウナ。老妻として嗣子「パウロ

へツトロイジユを以て徳位を是令帝よりとせ
 尚曆より七十八十六年三十二皇后ナタリマアリ
 キセワ十一歳より一歳後マリヤヒヨトロウ
 ナニ二男一女あり嫡男アリキサンバーロイジユ
 千七百七十五年生當兩午次男ゴニゼンバーウロ
 イジユ千七百八十一年生當兩午三女あり
 アリキサン・バーウロナニ千七百八十三年生當
 四午歳

都々彼玉ハ今帝崩るハ皇后位一后崩るハ
 ハ嫡男位一即位の系は此のよ一統統るハ
 次男ニ女あり多門の内一即位するも
 承按ニ魯西亜近代の帝系和彙証録スル所ノ
 西史ヲ考フレハたノ如シ

オペテルアレキシウナ
 カタリナ・アレキシエウナ

アレキシス帝ノ第三子ニメ彼國
 中興ノ大聖主也故ニ尊号ヲ加ヘテ
 尊号トイフ義ニシテ上古厄勒奈亞
 國ノ帝アレキサンテ以来大徳英雄ノ
 君王ハ此号ヲ加ヘテ尊号フナリ
 ペテル帝ノ后ニメ大徳アリ帝ヲ輔ケ
 テ國ニ功アリ世ニコレヲ尊号トケナア

示・フロウーロト云コレ仁徳ノ女
ト云義ナリ「ペテル帝」殂メ後継テ
母帝トナレリ

ペテルコロオテ「太子」アレキシウス
ペトロウツノ子ナリ太子ハ「ペテル
コロオテ」帝ニ先テ卒ス故ニ女帝ノ
遺詔ニヨツテ立テ帝トナル三年ヲ殂
ス子ナシ故ニ下ノ女帝立ツ

ペテルコロオテ「兄」イハレアレキシ
ウツノ女ニメ初メ「イルラド」國
公ニ嫁ス後寡トナリテ彼國ヲ治メタ
リシカ「ペテル」第二世ノ帝殂メ嗣ナ
キヲ以テ國人迎テ皇統ヲ嗣シム亦英
雄大徳ノ女帝ナリ

「ペテル・アレキシウツ」第二世

「アレナ・イハレ」ウナ

又ヨハン子ス氏イフ上ニ云女帝「アンナ」姉「カタリナ・イハ
ウナ」ノ女「アンナ」ナル者入ル瑪泥亞ノ「メエケ」ニ「公
子」會西豆ニ在テ貴官ヲナセル者ニ嫁メ生ム所ニ僅ニ周歲
ニ滿サリシカ上ニイフ女帝殂セシニ因テ其母コレヲ立テ帝
トシタリ而シテ其國政ヲ擅ニス故ニ國人服セスメ其次
年ニ皆會議シテコレヲ廢シ其父母ト死ニ「ナル」公城ニ遷
メ下ニ云女帝ヲ立テリ

「イハン」

「エリサベト・ペトロウ」ナ

ペテル・コロオテ帝ノ少女ニメ即上ノ女帝カ
タリナ「所生」ナリ亦大徳アルヲ以テ國人コ
レヲ推尊シテ帝位ニ即カシム此帝不犯ニ
メ子ナシ故ニ其姪ヲ立テ位ヲ嗣シム

カ多ナ。アキシエウナ第二世

初ノ名ハカ、アウグスタフリテリ
カト云入尔瑪泥亜ノアレハルト國
公コリスチアンアウグストスノ女ナ
リケトル第三世ノ帝ニ嫁スルニ及
テ魯西亞ノ教ヲ受テ今各ニ改ム帝
祖メ位ヲ嗣テ女帝トナル

此書ニ云フカタリナ。テ。テウエーテハ和
蘭語ニテ第一トイフニテ即トニイフ女帝「カタリナ」對メ第
ニト稱スルナリ魯西亞ニテハ「エカテリナ」ト稱ス今時見ル所
魯西亞ノ錢貨ニ此女帝ノ面貌アルモノ、傍ニモ「エカテリナ」第
ニト記セリコレ光太夫カ謁見セシ女帝ナリ寛政丁卯ノ冬彼曆
元一千七百 年ノ冬ニ六十九歳ニメ歿ストイフ

一曆元ノ多當曆千七百八十六年ハ當帝祖業ノリノ年曆
ヨリ別ニ七万零二百五十四年トシテ精ニ考メ

精々ハ魯西亞開闢ノリノ曆考メ

永松ノ曆元ノ「丙午」ノ歲一千七百八十六年ト云ハ
改選巴洲中興革命ノ時ヨリノ年号ニメ改選巴
諸國皆コレヲ用ユルナリ

七万二千五百四十四年トアルハ七千二百九十五年
ノ誤リナリ世界開基ヨリノ年數ニメ歐羅巴諸
國ニテハ皆此丙午ノ年マテヲ世界開基以來五
千七百九十年ト稱スレバ魯西亞ニテハ此歲マ
テヲ開基以來七千二百九十五年ト稱ス
魯西亞ニテハ近世マテ中興革命以來ノ年号ヲ用

スメ崗基以来ノ年号ノミヲ称セシガ彼聖主トヤ
テルゴロオテ「帝ヨリ以来他ノ歐邏巴ニ同シク
中興ノ年号ヲ用フト云

一先女帝イ常作エ「イカテリナ」の政道ハ仁徳厚く憐愍深く玉
民信服セリ今帝ハ刑罰ヲ嚴ニ一もも猛威ある
所小國民以爲苦とシとも恨を念むるもの多し
く結成んとす

按「源家」の伝と合す

一イルコツコイ 略してイルコトといつ所の守護人
ヒヨートロケレボイイジユ取る私欲の品に依て

帝教を奉る者首を刎らばしと云イルクツコイ「キル
センスコイの二國ハ東方の古風ありは所の守護人
也況や「民」に於てを推考す」と也

一イルクツコイ 凡て考す 又東北より南つくとオ
ホツカといつ此より考するハ「子」の守護人ホ
トルタサハリイチ「ソボル」といふ姓ハ「サハ
サハリイチ」其「ソホウ」といふハ字形も

按「此考」を「タカ」本編「英聞」命名の終に
詳しき且は姓名を「伝」するとの假名の得り者
「一」 凡て考す「サホツチカイリ」に「サハリイチ

外海糸の類と求めて交易するも東ハセー。但ラ
ラウストニエと云大伴あれとも通じりさるる能
ハズと云つるも去るを

ヘツソイ 白熊毛 毛赤く色白くト云の如
なり

ラレン 麻毛 日本地の麻と違ひ角は龍毛
毛短く厚く皮柔らうして皮好之細角の色白く
もくめあつて白犀角の如く大なる皮角を
牛角の如くもす

按ハ此麻毛を多く産す清人

別麻と云ふ。扱之能産行製多集は詳ふ

ホイタ。ラニ夏なま 毛解 等の皮類ある多し何
品と云ふ

一イルクツコイ 繁華なる市港より富饒の地な
り扱は港とオホツカも同く繁華ありといふ
もイルクツコイハ劣り多し去地のより里程ホの
事ハ末の今條より云ふ

イルクツコイより産すは地十の総蕙京の如
交易の賣物ハ往還六千ハ程

実力の商人のルハ星を以て里程の事をとを極め
がむ

拙い光を久仙を海氏等在留するイルコーツ
カニルをうそを伝不備小詳をを

子ルセンスコイ センボロアエシセノサフート

風説考ハ子ルトシキンスコイと云ふたり

は白海程以所ハ子ルコイゴロトの守護人の

本陳をて居るへの守と氣勢一全派海ホの味を

建^前急^前西^前垂^前中^前一の考^前鏡^前なる^前所^前の^前き^前 セルボ

口 ^前ラ^前正^前三^前セ^前ー^前サ^前フ^前ー^前ト^前と^前し^前ハ^前子^前ル^前セ^前ニ^前ス^前コ^前イ^前の^前金

限山といわむこ

地球^註 西金山東金山と二名書うり星ありん

はありうハ唐ちハ二海^註のよう極界のケレ^註ポン

長^註協^註の^註事^註ハ^註真^註門^註の^註名^註を^註「^註キ^註ヤ^註ー^註フ^註タ^註」^註と^註云^註ハ

ハ^註交^註り^註ゆ^註キ^註て^註よ^註て^註維^註年^註の^註氏^註を^註繁^註く^註而^註も^註の^註真^註面

の外^註バ^註イ^註カ^註ウ^註海^註宿^註を^註り^註今^註ハ^註通^註新^註す

アスタラハマ

万^註玉^註地^註名^註考^註ハ^註亞^註期^註德^註辣^註罕^註と^註云^註り^註又

凡^註説^註考^註ハ^註ア^註ス^註ト^註ラ^註カ^註ン^註 北^註高^註海^註の^註北^註緯^註こ

と^註云^註ハ^註地^註緯^註五^註十^註二^註度^註 モ^註ス^註コ^註ー^註ヒ^註ア^註ユ^註存^註古^註と

あり

按よは條紀等必を誤遠ひ多るべくと
つけて書き取りし解しつゝのさし多し又
地名他名出の亦多しつゝつゝハ他等の誤り
も少しつゝつゝハバйкаウハバ井カル湖
あるべしハイルクツコイハ近き湖水
あり星海海ニ多ありバйкаル湖の亦本
編ニ詳し星海宿ハ西蕃の地ありて
黄河ハ出る源あり魯西亜の界と説く
極めてきくは通船なるのみあり

等の形多し文記はこれ何等の條あり西エフロ按ニ改選の方ハ
繁華あり巴の事形も遙のを境も急なり

一マラロシヤ キーエウといふニ必と伏後をれを
西ハ政通巴南ハロシヤと云 按よは既未定又亜細亞
亜墨利加一帯又魯西亜と成ありと云 エリコ
ロシヤといふ按よは説かす又ハキタイス 唐土と云
キタイスコイカールスと云

一 按よキタイスコイハ契丹なりを解本編ニ詳し
北京の主をハシといふ又地誌の圖ニ忘塔意西葛

といふ西をたり疑くハ古ハ多クハ然きも地
方のみ違ふ隔りたれハ同地名とも聞えを依
る以て又アツラツラマシキ地誌の名も出
後考を傳ふキタイスコイハペイキン北京ナチンユ
クワンチヨハイ等の地名こといふは地名七万ハ
地名考ニ符合せんハ古ハ中昔の以て今の
法より亞細亞の内を攻め討んとて大軍を領し
莫と魯西亞の帝傳くアツラ不可なり我エリユロシ
ヤの廣きをふ知や一度「チキリ」といふは何を以て
是より敵せんや

按ニチキリハ軍畧と目する士なりと樂と奏ハ
炮を放つまゝの事と目する事なり又軍の事を熟
識せしむ

ハン北京の是をアツラして敵て進む事を以て然し
て和議を調へ之の関を立て交りて始しとや唐
土の産物何れもいふおめゆきといふ事なり穀物
綿布茶種の外は他代ハ皮革馬羊或ハ
改選巴産の干魚の類なりと云

按ニチ那アツラ物の事ハ略本編ニ記す
亦按ニ北京帝を彼ハンといふ事ハ支那の書

載^ス汗^{なる}る^る汗^ハ韃^韃語^ミ君^長ヲ^稱メ
汗^ト云^{モノ}アリ^ト見^ユ今^ノ清^朝ハ^韃ヨリ^起
リ^{タル}モノ^{ナル}ユ^エニ^和蘭^及魯^西亞^等西^洋諸^國
ニ^テコ^レヲ^カニ^又ハ^シト^稱ス^ルナ^リト^見ユ^和
蘭^ノ書^ニ

作^レリ

元^朝ノ^始末^ヲ記^{セル}西^書ニ^元ノ^帝ノ^名ヲ^シン^ギス。
汗^元太^祖尊^号ヲ^オク^{タイ}カ^ニ高^濶台^カニ^太宗^ノ名^ヲイ^ユウ。
汗^成吉^思ナ^リカ^ニ定^宗ノ^類ナ^リ又^西書^中ニ^清ノ^康熙^ノ
像^ヲ畫^キタル^{モノ}ノ^下ニ^汗康熙^{一名}

ト記セルカンモコノカニ汗

按^シ魯^西亞^ト支^那ト^戦争^ヒ及^ヒシ^テ盛^京通^志
ニ^龍沙^紀畧^等ニ^詳ナ^リ西^書ニ^略説^スル^所
ヲ^見ル^ニ清^ノ順^治中^ニ魯^西亞^三タ^ヒ北^京ニ^使
ヲ^遣ス^康熙^ニ至^テ聘^使益^多シ^而ル^ニア^モル^河
漢^ニ云^ク黒^龍江^ニテ^真珠^ヲ採^ルト^又其^辺ニ^テ貂^ヲ
捕^ルト^トニ^テ兩^國ノ^人争^ヲ起^メ支^那ヨリ^兵
ヲ^遣魯^西亞^所築^ク黒^龍江^ノ辺^{ナル}ハ^シバ^シニ^ト
イ^フ城^地ヲ^攻ム^コレ^薩通^志等^ニ雅^シカ^ルニ^魯西^亞
ノ^帝コ^レヲ^聞テ^絶遠^ノ地^ニ兵^ヲ勞^メ人^民

ヲ役スルヲ欲セス因テ此城地ヲ支那ニ贈
テ和ヲ議シ康熙廿八年ニ其和遂ニ成テアル
ガン河ヲ以テ兩國ノ界トシ分界ノ碑ヲ建テ
コレヨリ今ニ至テ兩國聘使及商賈交易年々
絶エスト云々コレ今支那魯西亞共ニ其勢極
テ盛ナリトイヘ凡支那ハ其邊疆ニ争フカ
ニナレレハ敢テ其威ヲキハメテ韃靼ノ北ナ
ル嚴寒ノ地ヲ侵ス心ナク魯西亞モ亦其西方
改羅巴諸國都兒格トル百爾西亞等ハ時々事アル
緊要ノ要地重ナレハ最モ要害ヲ嚴ニメ他國若

乱ルレハコレニ乘メ國ヲ拓クトモアレ凡東
方ハ其帝都ヲ離ル、ト極メテ遠クメ強弩ノ末
勢ナレハ支那ト好ミヲ結ヒ貨物ヲ交易スル
其最願フ所ニメ絶遠ノ地ニ兵ヲ勞メ支那ノ
境ヲ侵ス心ハナキナリコレニ因テ二國共ニ和
ヲ主トセシトキコユ
コノ「アルガン河ノ邊マテ漸々南ニ向ヒテ魯
西亞ヨリ侵掠セシナリコノ辺昔時ハ何レモ
屬セサル諸地」シヒリト呼ヘル總國ナリ百有
餘年来支那北疆ト界ヲ接セル國トナレリ其本

土トハ元ト至テ絶遠ノ境ナリ

一ボーフラ 獵虎をいふ事との夷人漁せざる

のやカムサスカカアテ共ニ取集りて都合

はニ子枚程ゆする年を定上カイシヨウとす

原土の交刃以糸を穿とん 上糸獵虎皮を枚

小細木縁百五枚反 中糸ハ百反り糸をハ八十

反位よりあぶとそ獵虎尾とラホース足をラ

フケ陰莖成ウイシタとソム 膻肭脔のタケリ

トクも勇ありとそ

子リバ 海豹 ゴーゼテ 膻肭脔 シウリ 海鹿

皆此島よりそ考さるものそゆや何れも是を文

力の不とす

一又メツノイ 一按ニオストロク島也 ヲーストロフとソムとソムと生さゆ

あり此れ大凡はの甚良はおとる石也をを

虫ニ善諭するといふ此れ務めくハ洞氣海

を氣まてハあれや此れをムスタバムスタバの

物送る

一カムサスカ オホーツカ急の麻コゾーラと云日本

と云はれ 土民の貢たるハ他く交刃を許さる事

一積り送ると持

一レナとつふ大河あり魯森亞才一の川之ニ次
アモル ゆ説考ニアミルと云 此河流の末ハ四時
東ニ流る通船付凡河原の才ハ其川内ニ大船敷
船を繋ぐとつふ川の度大なる此れを以て推量
をくくとつふ

一船底ニ千天即日本曲尺七五小分當船凡六十人
余とつふ

但末流の川幅七十エルスタ 此れ日本里敷十九里十六
丁ニつゝる船の度量の少
詳なるは末流の船
五程の船と云ふ 其川之とつふ河原ハ川幅
ハエルスタニ里敷 又三千〇里ハ幅凡六十サセン 日本里
敷三丁

此ニ 此處ニエレホレンスコイ カニサスト等の島有
リ又アモルとつふ川ハ魯森亞と度王の境ハ此船
を道行する流ハイルクツコイ 子ルセンスコイ 通流を
其河原ハ度出みしてキヤイーフタ 此の島の
島ニ在リ の地を
流船行

正子セスカの川ハバイフウバイカルよりイルク
ツコイニ 此島の島ニ音何利牙と云ふ
ケイニ中畧して後ハ其の形考の類譯と云
按ニ此は通解

其てイルクウと云川ニ合流ウセコウカとつふ川
流れ流るる勢法 河名正子セスコイとつふ又

水傍にヤトルハンスコイの地に入り流川を合せ
くち河にふる各をワックスカと云流終してせ
ーエルヲキヤンといふ北海へ入るなり又帝教
の川の各モスクワ子ルセンスコイ川これハ子
ルヤヤシツカノ二川あり又トボリスコイといふ
所ヲイラントボの二川あり此は考トボール
スカヤとあり 惣て川の
各に依る是の号ありと云

按加山

アスタラハコよりカスヒスユイ此は考ニカス
トーセイニあり

流る川 ウラカといふ又ゴロトタラハニエイスコイ

万国地名考ニ大韃靼とあり按ニハニハ川流の
帝をいふエリハ伏流すといふの由スコイハ
玉と云茂魯西亜流く流玉を流終して玉の号
号とエリコロシヤといふ都凡ハゴロトタルタハ
少京帝は流いすると云茂玉を流く各付する
ありん

エナといふ川あり水海オホーツカカムサスカの色
通りの形にありて造作すといふ
正子セスコイトボリスコイの号ふキヤトタとい

ふ川ありギヤフタ 魯西亜と度土の間のこの川オロシ
又オロシアの多き河もあつたか
アノ属一漢字も通じりしるも倍々
しるるべきも方言を記す

春 ハフル 夏 ナジリ 秋 アモル 冬 ウブ 一子ハヤニホヨ

三 ホルボ 四 テルボ 五 ヲホシ 六 コルユ 七 トロハ ナイモン

九 エリ 十 カルホ 百 ソシ 千 ミシカ 万 トモシ

より多海を流しギヤランスコイハルホースの地を
るそ小海大洋に入也ゴロータラハンスコイユ「二ツ

といふ川あり河原ハ大玉ありラートカと云湖水
凡俗考ユラトカヲシテ地産の馬小蛇得河とあり若カハ外ハ
又凡俗考ユシユウシヤの玉梅ニ雪際並ナルヘシ疑ふと云ハ疑
ふらくハハハ河原の 湯出マサンビケレボル一ツハケレ
大玉也 みるくも一

を流し ワシリウスコ井 オ、ストロウと云 仙臺標人ワシラ
イツケオストロと

光る年々 島の思流して海に入る東北ハハルオ
方角也 レンスコイウシヤオホツカの 二川ハ北流し

て北海に入る各河未だ不えといふ又チマウキチカム
カノ東北にて地産の玉あり極北の玉あり岩を崩し我
るゆへ産物と云く多しあるも後業中オレニといふ産を
して細産といふ アナーテリといふ川あり因るオロシ

ア人若ては玉をアナーテリスコイと云ふ是より
水ハ山谷産しといふも 四島を流く通じりしるる

叶るゆへ是方ニ要利加ふるといふも是れを
のこすは 始終海と流して海海叶りたなり

魯西亞人大洋に臨んで二十里程を去る所
とも道に地方を去るして海にいと去るを夏の
よきをいふ

按は北流川の北の方角をを往と解しこの
もの多しむ事名のあつて遠く多しと思はる彼地
緯度を推してこれを問ふ分岐する所は北を
以てたれし由りあき明かすべし但たしつたる
面よりあつてかゝるといふはさしはさし
所あり

魯西亞のちろ按スルニ「エニセア」河又「エ子サイ」

ト云フモノハ韃靼ノ「キルギセン」ノ地ヨリ出ツ又「トシ
ムスカ」ト云河アリコレハ「バイカル」湖ヨリ出テ「エ
セア」河ニ合シテ北海ニ入ル
帝都「モスコウ」ニハ「モスクワ」「子クリン」ノ西河アリ
トボルスキニハ「イチス」トボルノ西河アリ「アス
タラカン」ヨリ北高海ニ入ル河ヲ「高ル加」ト云
永按ニ北高海魯西亞語ニテ「キユアレンスコイ」モ
又カスビスコエモ「モレ」ニ云「モレ」ハ海ト云フ「キユア
レンスコイ」カスビスコエハ並ニ其海辺ノ地名ニ
「接」コトヲ誤リカ
二「ソ」トイフ川有リ河原ハ大國ニテ「ガリ」ト云

永按ニ「ニイハ子エバト云河アリ魯西亜ノ「ラトガ」
ト云湖ヨリ出テ「インクリア」ノ地ヲ過キテ今ノ
新都サンペテルブルク一名ペテルズブルクニ至リ「ワシリウ」
スコイ、オストロウ等數箇ノ島ヲナシテ「ロシア」ト云
海灣ニ入ル

地球ノ圖ニ包得河トアルハ東北鞆靴ニアリ雪
際ユシラハ魯西亜ノ西ニアリ大國ニ昔シハ其勢盛ナ
リシカ「ペトルゴロオテ」ノ時ヨリ魯西亜ノ為ニ大ニ
破ラレ其後又其國ニ嗣ナクメ女帝「エリサベト」
ノ姪ヲ立テ王トナシ魯西亜ノ法教ヲ受タリ

「サンビケレボル」又ベケレボルとアルハ「サントペテル」
ブルク又「ベテルブルク」ノ音ヲ轉訛シテキタルナ
リ

一里程ホを度量するを尋るふ

一寸 エルシヨールカ 日本曲尺壹寸五分之六
度一々 センテと云四寸日本曲尺六寸あり 是を四度一々
尺六寸也 アルシンと云 緬布を度る曲尺日本曲尺
天日本曲尺寸長後小 アルシン 三度一々 サセンと云 日本曲尺
一日本曲尺間キ 五百サセンを以てエルスタと云 日本曲尺三
分二厘 三寸里程 エルスタ七度半一々 ミイラと云 日本里程七十
拾丁ニ

三丁ニ此寸尺分と以て海陸の行程里教を量
知す

拙る平編里程尺度の程と核考す

又海上の行程ハ何とてなると尋じよ小大船は
船中も舟も網を流して凡一時何程の程又を走
て知り船中も砂土を以て今一時何里を走ると
定むるものなり
他程ハ日午の御引とて船の如く千ヤニリ
て凡下程の程を一編よして
まて船中も舟も網の程の程弱大極を名均ラ一時的
上と程の程も程あり大程を名均ラ一時的
ふい

海陸の行程尺度の程と核考す

教員五人の程知たる所を記す

一 本館頭地ツカマフム
クナシリ島海上 六十エルスタ 日本里教 凡於六里

一 ツナシ島海上
エトロフ海上 二十一エルスタ 同五里程

一 ツナシリ島周廻ハ魯西亜人未初や量教る凡ハ
我世を介するもの教員記す

一 エトロフ島海上
ウルツフ島海上 六十五エルスタ 同十八里程

一 エトロフ島周廻ハ同

一 ウルツフ島周廻百五十九エルスタ凡四十一里程

- 一 ウルツフ島より 三十五ルスタ 日八里程
- 一 千リホイ島より 二十五ルスタ 日九里程
- 一 マカニル、島ト 五百ルスタ 日百二十里程
- 一 シモシリ島ト 九百ルスタ 日二百五十里程
- 一 カムサスカニ島ト
ウルツフ島よりカムサスカニ島
と約五里程 四百五里程
- 一 カムサスカニ島ト 八百ルスタ
- 一 オホツカ島より 三十五ルスタ 日九里程
- 一 イルクツコイ島ト 九里程

地方の大畧を記す所の巻後二枚ハ魯西亜
人物言語佛像等圖画之綴ニシテ其ノ詳ク

○ 振表地 東北の徳島エトロボ島より先キくの島
島地各夷人ハ其佛像等ノ如ク世オロミア人
名セズ不たの如ク

- 一 夷名エトロボ島 魯西亜改名 オ、セム、ナツサイ 又 コテエソ ナツサトイ
- 一 按ニオ、セム、ナツサイ 魯西亜言十八と云ふなり
- 一 日 ウルツフ島 ル セム、ナツサトイ
- 一 按ニセム、ナツサイハ十七と云ふニ ウルツフハ 獵虎島なり

一 日 マカニル島 日 セウヒ

按ニ十六をセシナツサイと云ふ恐くハ此傳寫の誤り
ウ或ハ違ハル

一 日 シモシリ島 日 セスナツサトイ

按ニセシナツサイと云ふ十六のウ

一 日 ケト丹島 日 ベツナツサトイ

按ニ十五をビヤチナツサイと云ふを傳う

一 日 ウセシリ島 日 セライナツサトイ

按ニ十四をキヤテレナツサイと云ふを傳う

一 日 ウシヤウ島 日 テリナイツサトイ

按ニ十三をテレナツサイと云ふを傳う

一 日 ラクハケ島 日 テエナツサトイ

按ニ十二をドハ空ナツサイと云ふを傳う

一 日 モトウ島 日 オリナツサトイ

按ニ十一をオセンナツサイと云ふを傳う

一 日 チルンコタン島 日 テンヤトイ

ハルヲマコタン島 日 テエアトイ

按ニテエアトイ必ズ誤寫の遠の内を云ふ九ふれハ
「セイウキチ」と云ふ

一 日 無名島 日 オシモイ

按ニハラオ、セムとリツを誤リ

一日ボロモシリ島 日 セリモイ

按ニセリモイ未詳セがルハセイムと云フ

一日無名島 日 ヒヤトイ

按ニヒヤトイ未詳或ハ六多ルハセイシる

一日無名島 日 セストイ

按ニみるルハヒヤアジと云セイシハ六と云セ六多後の

石運ルハあつと云

一日無名島 日 セラオルトイ

按ニセララルトイ未詳四多ルハ「キヤテール」と云

一日無名島 日 テレトイ

按ニテレハ三多テレトイと云バニツ目と云と云

一日ラニ子ニタシ島 日 フトロイ

按ニニハ「ド」より又フロロイと云す

一日ニヤニコタン島 日 ホレセレツカ

一日無名島 日 エラエート

一日カムシヤツケ 日 カムサスカ

按ニカムシヤツケを除きてエトロプと云島也

ケ天也仙臺漂流人の話ニ彼人の話ニ口^{シテ}據^ル地
 と「カミシヤーツカヨリ廿一島あり牙十八目ニ
 あらふ家あり」と彼所^ニ飲^ムとあせしといふは十八日
 ハウルツプ^ウニモシリ^ウ。ちうはハエトロフ島を名
 けて牙十八とせしむ島の改名を考ふるに別ニ定
 めるべく島の多寡の當符さうしむ申但家及あ
 る振ふもアムとて遠くはあはれぬとあるは地名
 を「カフカ」といふ人ハ通稱さう由各島の系名詳
 小を後々もあつた界図考工アムとてり参考さ
 へし昔より島幅大ニ十の島ありといふは島と

のりありぶく「カムシヤツケ」といふ今く日本厚島と
 又ゆふ彼より拾ハ目まで蘇能せしれハ遠
 眼よりしや
 嘗て宗上氏の話をきくは「カムシヤツケ」ハ其云乾
 肉の多し昔ハちう枯名を製して食料とあせ
 しむるを魯西^ニ魚より我享保通名とあ飲とな
 せしより改名して「カミシヤーツケ」といふ中和系
 島の地名ハ「カムサスカ」又「カムシカツ」又「カムシカ
 ツトカ」といふ也古名「ホニル、カ」といひ中近後
 々の書よりいふ也

「ハロリーナニセ」といふ又同島「ナナホ」の夫人「ハロ
シヒ」ハ魯奇亜製の裳を総一徳^ト授くる方針或
ハ陵^トも不^ト拍^トさる^ト一^ト衣^ト後の製^トホ
も悉く^トあ^トり^ト一^トあ^トり^ト一^トあ^トり^トハを^ト島^トホ
る「ボロモシリ」ヲ^ト子^トコ^トメ^ト一^ト島の夫人の作^トく^トあ^トる
一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
魯西亞人の指^トは^ト一^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
夷船ハ船^トの^ト様^ト皮^ト或^トハ^ト繩^ト又^ト線^トを^ト以^トて^ト作^トる^ト
る^トその^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト

一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
魯西亞人の指^トは^ト一^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
夷船ハ船^トの^ト様^ト皮^ト或^トハ^ト繩^ト又^ト線^トを^ト以^トて^ト作^トる^ト
る^トその^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト
一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
魯西亞人の指^トは^ト一^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
夷船ハ船^トの^ト様^ト皮^ト或^トハ^ト繩^ト又^ト線^トを^ト以^トて^ト作^トる^ト
る^トその^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト
一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
魯西亞人の指^トは^ト一^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
夷船ハ船^トの^ト様^ト皮^ト或^トハ^ト繩^ト又^ト線^トを^ト以^トて^ト作^トる^ト
る^トその^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト
一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
魯西亞人の指^トは^ト一^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト
夷船ハ船^トの^ト様^ト皮^ト或^トハ^ト繩^ト又^ト線^トを^ト以^トて^ト作^トる^ト
る^トその^ト形^トも^ト緒^トと^トあ^トり^ト一^ト多^トの夫人の作^トく^トあ^トる^ト

易いオロシヤ方の産物ハ上品ヲ價高く日本
産物ハ一種ヲある其價低キモノと認り知る
日多ク相立世々も亦日本よりハ極東程と
別々して和語を習ふ事と甘やド日本ノ風俗を
習ふ事と相違ナシ教つてつまる極東ハ愚鈍
なる物トはさるる其れ彼を愚うして大利
を貪んる為なり以て地多ク高買のあのみ入はむ
場而も其只利益のものを拘り教育の及ばざる
故あり其故を極東より見るに日本ノ風俗を福を
享ハるは殊をさるるを極東飲となすオロシヤ

附島方よりハ相立海切ノ教諭有る故に其
事功者より其土化をも其極東に後進する
と云ふ有り

一魯西亜ノ風俗あり其とは是れの方角より後
海一年を要して巡行し其地より何方ても直落
せざる亦多し其力も亦強し但し其我々小国
後せしむるより又其亦亦も亦く土人愚昧も
地多し其物も無く其力を懐け力も亦く其物
産も亦く漸く此の商館を設けて遂に其亦有と
なり其れ其地と其務も亦其亦く因て之

他方と遊り地理を究り物産と求め布衣(衣)を
王^{カミ}と一告ると異^イなり一成功と書せらるるを記撰
するなりと云ふ

按^レノ^レ儒^ノ民^ノの^レ話^と符^を合^を彼^{オニ}テ^レイ^ツケ^振ル^ハ此^レ
記^述の^由

一ウ^ルツ^プを^名なり^大なる^を宮^によ^りて^一を^名あり^名を
シ^コン^ケモ^シリ^云ウ^ラモ^シリ^とい^ふは^此地^に獵^虎多^く
産^しお^つと^せい^あざ^し一^河の^等と^いは^す
又^ハ多^くと^カム^サス^カの^ちろ^ふ二^心の^大なる^河と^云ふ^一
を^コマ^ニト^ルス^コイ^ハ此^の高^を産^を同^く山^とハ

白^鳥と^産し^急湫^をと^出す^ハ島^一カ^ムサ^スカ^ナり^ハ
或^ニ昼^夜程^と云^又ハ^和し^しシ^コン^ケモ^リハ^ハ吹^風
た^れハ^ハ海^を取^らる^と云^ふは^ハ海^を務^める^所
舟^を行^く所^か一^たハ^シコ^ンケ^モリ^と名^を付^ける^由
由^者云^ハシ^コン^ケと^ハ虚^とい^ふ義^なれ^也オ^ロシ^ア
人^哉と^いく^名け^ると^云一^名ウ^ラヲ^モシ^リハ^夷
言^ハ霧^とい^ふ所^{なり}義^理同^一

按^レノ^レ虚^の義^未解^彼人^云ハ^いふ^俗情^なれ^ハ
か^ら多^く産^をる^所を^他と^いふ^一と^云ふ^は
一^たれ^らの^地海^を取^らる^所海^獣の^と

我由んよりして不図よりなりゆきんは且も地
産も欲せざる所なりされ玉内五穀絲綵といった
ると充て足るれハ何ぞ海獣皮を求むるを以てん
や彼はみりてハ古物申のもの之を丸蓋玉蔵を
の地ふれハ古物皮裘はあざれハ多きを防く
よ候へそ皆そ安用とあそむべきはこれ務めて
を求め求むるもあざるものとあはるるお懐席海豹
の類ハ必もそ他氷海は多く産するを丸蓋造化の
妙機あり穀類絲麻を産せざる玉人を求むるため
浩々たるの恩徳なり

一 本橋夷地 ツカマフといふ所の付ヨシコタンと云ふを
りハ大洋を渡るの一島ありて一とち梅は古代地
産の果實 西世の地果ありて日本の東に重島諸
島桂島の三地ありて一糖はうらぐハ此島の名也
コシケモシリ・ユマントルスコイ・メツノイ 梅島の事なり オハストロウ
ウ ウ 糖はうらぐハ此島の名也
はと島ハ日本の産物ハ糖はうらぐハ此島の名也
夷ハ國より我由んより即ち是を以ててを以て
あはるるがれハなりハ外玉よりハ産のをを以てて通

海島一ふ彼之を名す北アメリカの大海あり
といふも又遠く隔るる千度の遠きといふ事
古語に我日本を王将と名す右をゆきと名す
約島様と名するといふ名ありておろしと名する
とのみ

按て我を船夫地とす之を東洋業始り多し何そ
かゝるを洋僻島とす其よりあつて自の偏
る地なりや

亦按て明の時刊せる地球図に日本ノ東に重
海ありコレ西洋ノ古説ニモ亦コレアリ然レ其

所在未タ詳ナラストイヘリ

日本ヲ王将ニ名し金将多し限將多し桂馬島ニカタ
トルトイフハ甚シキ臆説ナリ地球圖支那明ノ
時所刊モ西洋ノ古圖ヲ説シタルモノ何ソ象棋象
ルニアラシヤ且王将金銀桂馬等ノ名曾テ彼ニハ
ナキナリコトヲ以テ知ルベシ

一風説ヲ考ふる飛驒を久二所といふ松前ニ於て舊記
し出たる書より於依井漢体内徳多痛形ニ石
積於セ人多し徳多も多し積於形なる一本積たる同
奥戸村伊勢尾利八系大戸村長松宮古漢也助何

多岐な命の者五人オロニア等と云ふことと延享
 元年の改のより右の内衛に多岐ムスクバムスク
 に浪浅二百枚とて右船にありたる由是船よりて
 此船に五ノキと尋ふるに遠くありしは者オホ
 ーツカと云ふに漂ふに夫より帝船より右船に浪浅
 をとらるれりその由を尋らるるに是者オホハイル
 クツエイは住居者にして此由祈へ於今三人の命あり
 と尋一人をイルクツコイの船に殺せし成り右船に
 ありし内衛に多岐ムスクのバータラレラニセイ千ヤと名を
 改む彼千七百八十三年我天明三年命は後て浪浅

のりて役是則を男よりイタララセイ千ヤの子年十
 七歳船に七十人ありのち船をあげつうてイルクツ
 ケラ出帆を何れかふふなり

按よイルクツコイの船に富しオホーツカ物帆ありし
 船よりそ船破れしとウルツコイと云ふに船中の人
 船中の刀刃浪浪浅玉細布等の貨物を奪ひて分
 ち取り船よりそをかけ後船よりウルツコイ
 の西海アタツト丹といふあり

近頃夷地より散在する所の英玉産の内紅毛船
 持渡りしにき浪浪浅に外毛船織物又

物亦多分は時分は多分、亦くと見ゆ美人は物傳へ
日本人と破の交りをもあし、さう段々及乞取
の古き少切端の紙は海夷地産の縞更紗木の
右紙糸等少切りさし入るる物、是は和紙工の
品、河二振紙は玉取木少し、美人の所持し
たるを價と取らせたるなり

此れは依て破船の振子を尋るよ、船中よ人形死
骸唯一つあり、刀痕を蒙り○○○を余ハ一人も
おけるハ、紙をよ換るく又ペーダシヲンセイイヤよ
り上り小達し、と尋るよ、あゝ穿鑿し尋ねおるよ

按よは條解をば破船の振子を尋るといふを
美人の尋ね知るし、文牒に美人は船にハ、船
中あり客あり外あり知る者あり、と尋るよ、
ヲンセイイヤより、上り小達し、といふ、さう
カ、是れハ、オニセイイヤハ、破船と免れ、海國
せり、振更紙も、は事、んも併せ考ふべし
ウルツプ島へ渡り来り、オロシヤ人美人共と色と透
し尋ね探れども、分曉なき、破船の事ハ、
按よ、是れ、是れ、ウルツプへ渡り来り、オロシヤ人の事

ある園より夫人との仕業もつづるべし
にその船末を語りつせに九折する
ホエトロボーの夫人はより
より當手平玉の仕業を添送りき
夫人の仕業
よきつづるを中絶し解きつづる

梅は當年とあるハイジヨ等「ウルツプ」で守授せしむる

一先年イルコツケの船三十四人
大津よなるよ北海沖一島
を以て終りつづる

リヤニ之度王の北とカラフトの
ツムマンケウとオホーツカへ
出らば

梅はイルコツケの船と
沿海の地とオホーツカ
は洲なる

志のよき人新の急死を
く懇ろに扱ひ當時は
一海の上も危
し一海の上も危
し一海の上も危

て出帆せしむるは極みたる王道の政法を
に當りしとて不慮の事あるまじき前のウツガ島
一際島の破船の何れの仕業とつらき船乗り
討し船の同如く脱れしれは考ふべきに
ゆつ

一 凡て考ふに裁せざるは明和八年辛卯の迄ハニゴロベニ
シテ島に泊るる船を海と云ふ通りたる事
尋常よりベニゴロハ本島トボリシヤといふ玉の考ふ
て各ハフムウアウツの誤といふ事先通オロシヤ因
れと云ふ居る内程と云はるる事多きありホツ

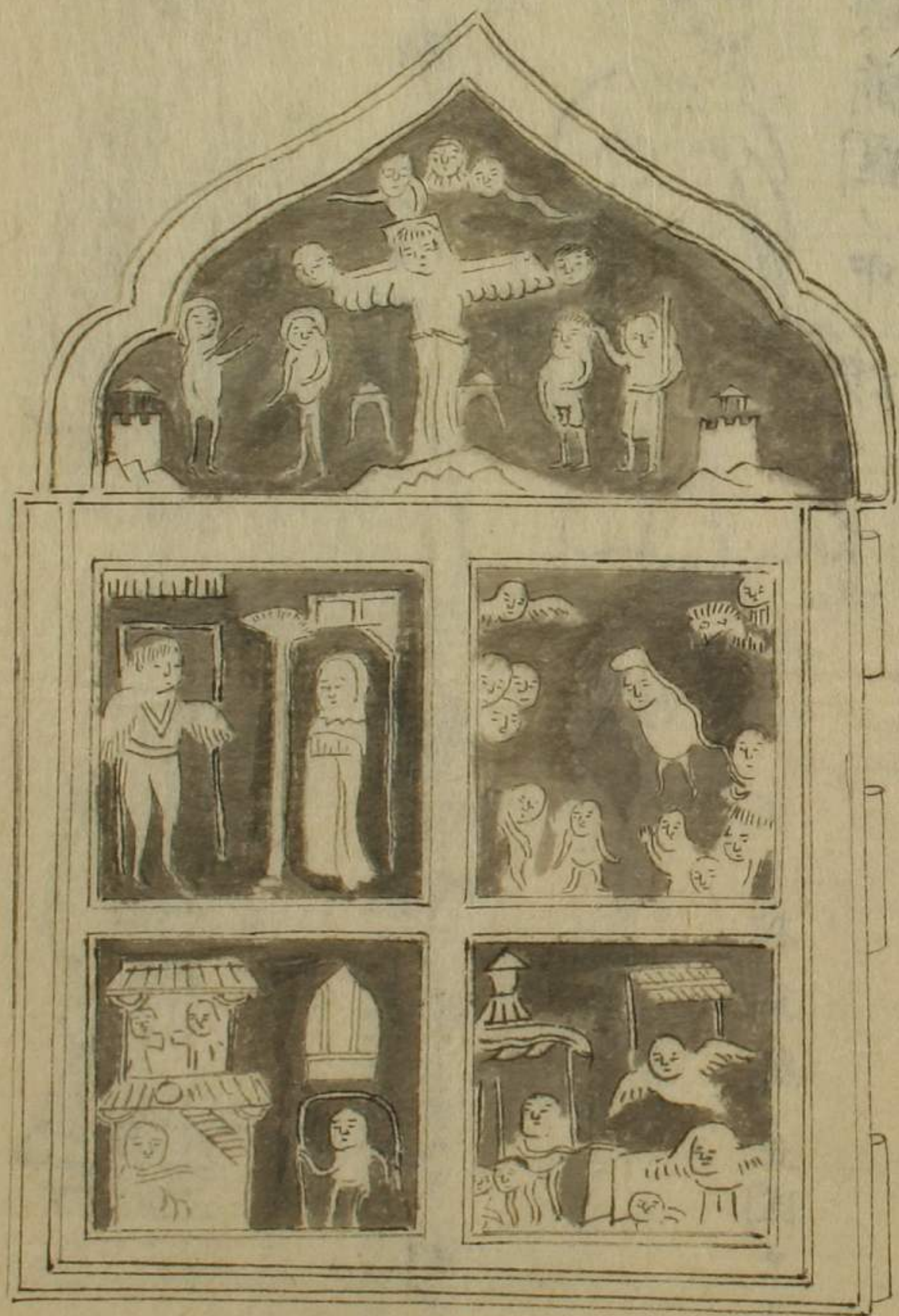
トカカムサスの間 ホレセレスコイセカアフカ」と三所一
流刑せらるるは終るは以て玉島の船を船役士とい
ふは是を考ふるにアウスといふ事ハ船中の者皆我
は以て船と云ふは船乗り日本の東南海を通航し應
帝亜海を云ふ本島一島と云ふ事ハ今も狼
藉の事多しハ後士を云ふ事ハ船乗りを云ふ事
を云ふ事ハ打擲し及び強盗と振舞はれを後人の
内バセローフといふ者も云ふ事ハ終ひ多し云ふ事
ハツコイテアト云者得心せざりし事ハ船乗り
を考ふ事ハ南と志し走りシモシリラツコ島の
先キヨウ

といつゝ島にお船の海運あつた小舟をせて船を
せよ水の用なきは各ふゆなる後人イツコイ
ロウはあつた先きの船をきつゝと押して中
舟をアウス程の若くはよく芽死せしふ折れき沙
濱に控まき出帆しそつて少初航を後フランスヤ
の内 安押市バテリー 杞理斯と云ふく总領館の
者 蔡國子 志をなすゆきつて存の始末をこれ地理の程
お詳 詳 しく述べて達せしむる殊にお賞ありしとを
又シモシリもやに控まれしと後人を振舞つ傳
一本玉の海とくしとつこきとをいふ賞も罰とな

く當時の事ありしと後言ふ人を交て大船
凡ハ船は之を海要利加玉の内へ渡海する事を
傳へしむるしとをいふ

按しは船隻双紙の事ありし阿波島へ船を寄
せしゆきの事ハ邊要を界図考中ニ詳しき係
せしむるなり

禮拜佛像圖



唐銅ニテ鑄物硝子ヲ燒キツケタルモノニ
屏風如クテウツガイアリテタノミスク四枚一具



正形圖ニ取りカタク略寫ス



コノ三佛ハ前圖ノ中ニ燒ツケタルモノアリコニ其略ヲトリテ寫セルニ



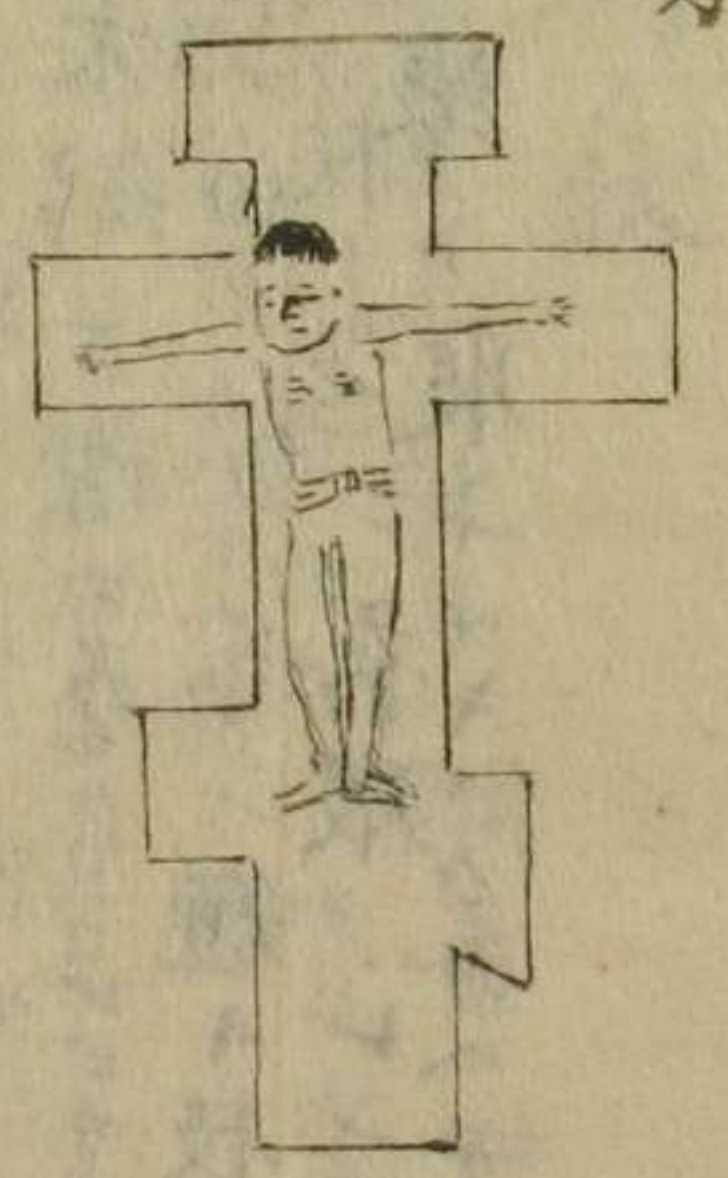
角柱ニテ作り文字ヲ彫リツケタルモノニ家ノ外所々ニ建テオキテ朝夕拜ラナス



按前編ニ正図アリ

尊崇佛像

唐銅鑄物



コレ朝夕礼拜ス

魯西亞人拜ヲスル圖



其法上ニ説ケルカ如シ

名
シメラントロヘイイジユヨソヨソ

我ニラ迎ニ出
タル時ノ図



イルクツコイの人

衣服ヲレシトイフ鹿皮ニ毛ヲ内ニシ蒲色ニ染・温納騎ノ皮ニ
テ縁ヲ取リタリ頭巾メリヤスノ如クアミタルモノ色ハヌ、ダケ
ナリサラサノ木綿ヲ襟ニ巻クコレニテ鼻ヲカム
丈々長カク色ハ白ク髪ハ赤シ短キ枝ヲ持タリ
按ニ枝ハ杖ナルベシ衣服ヲレシ不審クシ鹿ヲオレント
イハハ草ト服トノキ、タガヘナルベシ

同人應對セシ時ノ状

衣服ハ羅紗ヲ着上ニ純子ノ胴着ノ如キモノヲ
着ス前ハ銀ニ作リタルホタンジメナリ牛皮ノ如キモ
ニ紺木綿ノ表ヲツケ、ラツコノ皮ノ縁リヲトリ毛ニテ
アミタル股引ヲハキタリ皆ボタンカケナリ
両脇ニ火道具矢立等ヲ入ル、所ニ



名

イワシ

ウレコトイイシヨ、サスノスコイ
「ニコレコイシ」

家内ニ居ル時ノ圖

オホツカ
乃人

同ノ衣ノ式ノ類

下ニ羅紗ノ縹半ヲ着シ

上ニ綿衣ナリ

色白髪赤鼻高ク目細シ



從僕

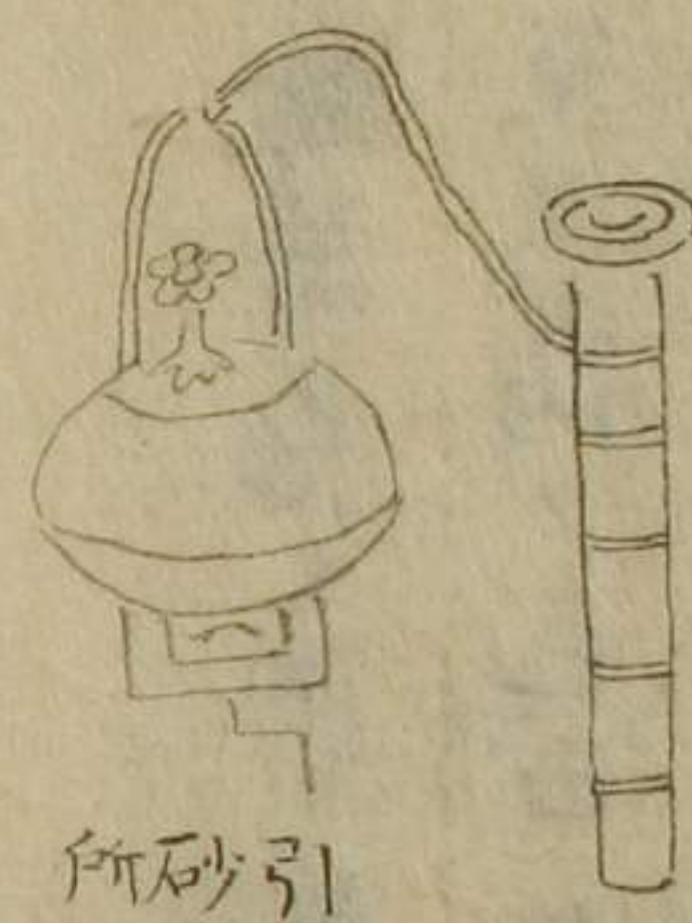
名

ニケタ圖



モミ皮ノ縫詰タルモノヲ着シ木綿ノ半股引ヲハキタリ
長々至テ高ク色白瘦シナリ髪赤シ

矢立
セリニリサ



引キ出シ
砂ヲ入ル
所ナリ

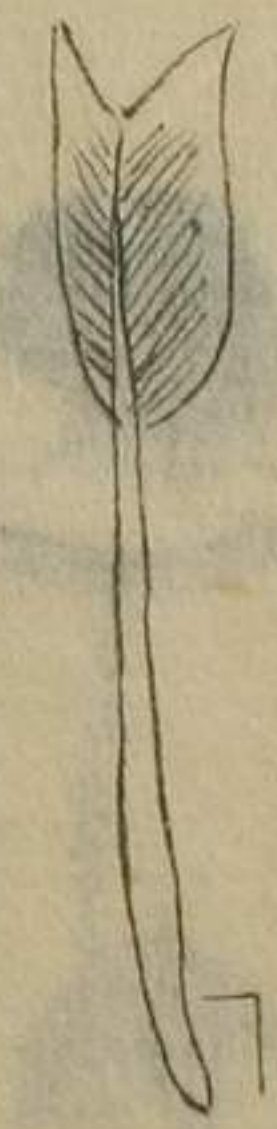
鍋
コシヨウ



唐銅鑄物

蓋ハ梳ノ如ク銅ニテ
打タルモノシ

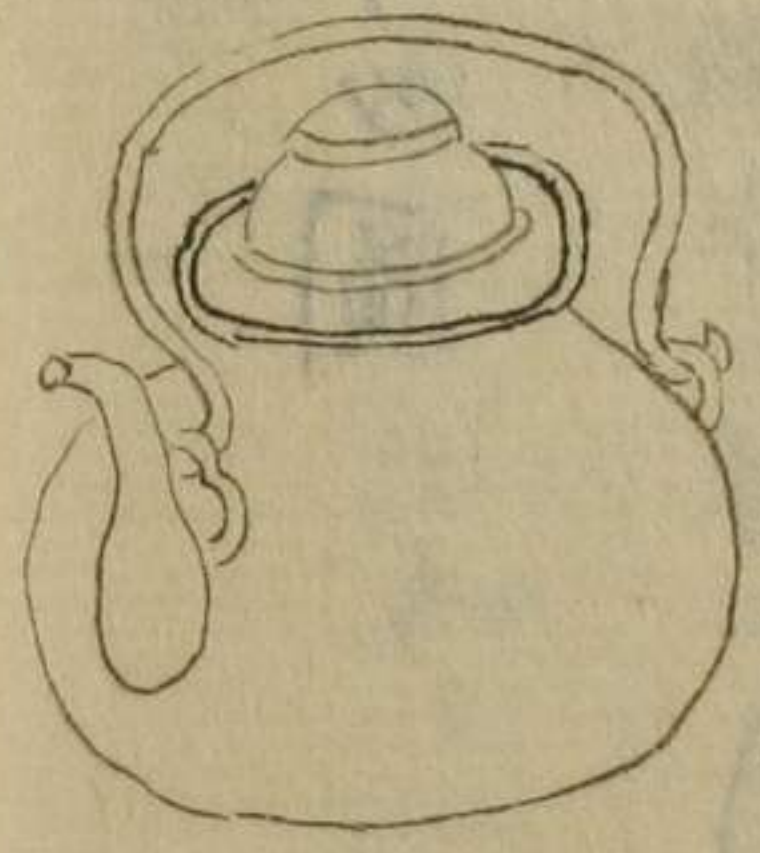
羽
筆



コノ処ヲソギ墨汁ヲツケ書ヲナス
黒エヲカワカスターニアトハ砂ヲマク

茶罐
千ヤイニ

銅ニテ打タル
モノ蓋ハ梳ノ
如シ



無蓋
鍋



南
ホウウ

北
セーエル

乾
ノルトエス

坤
シユリエス

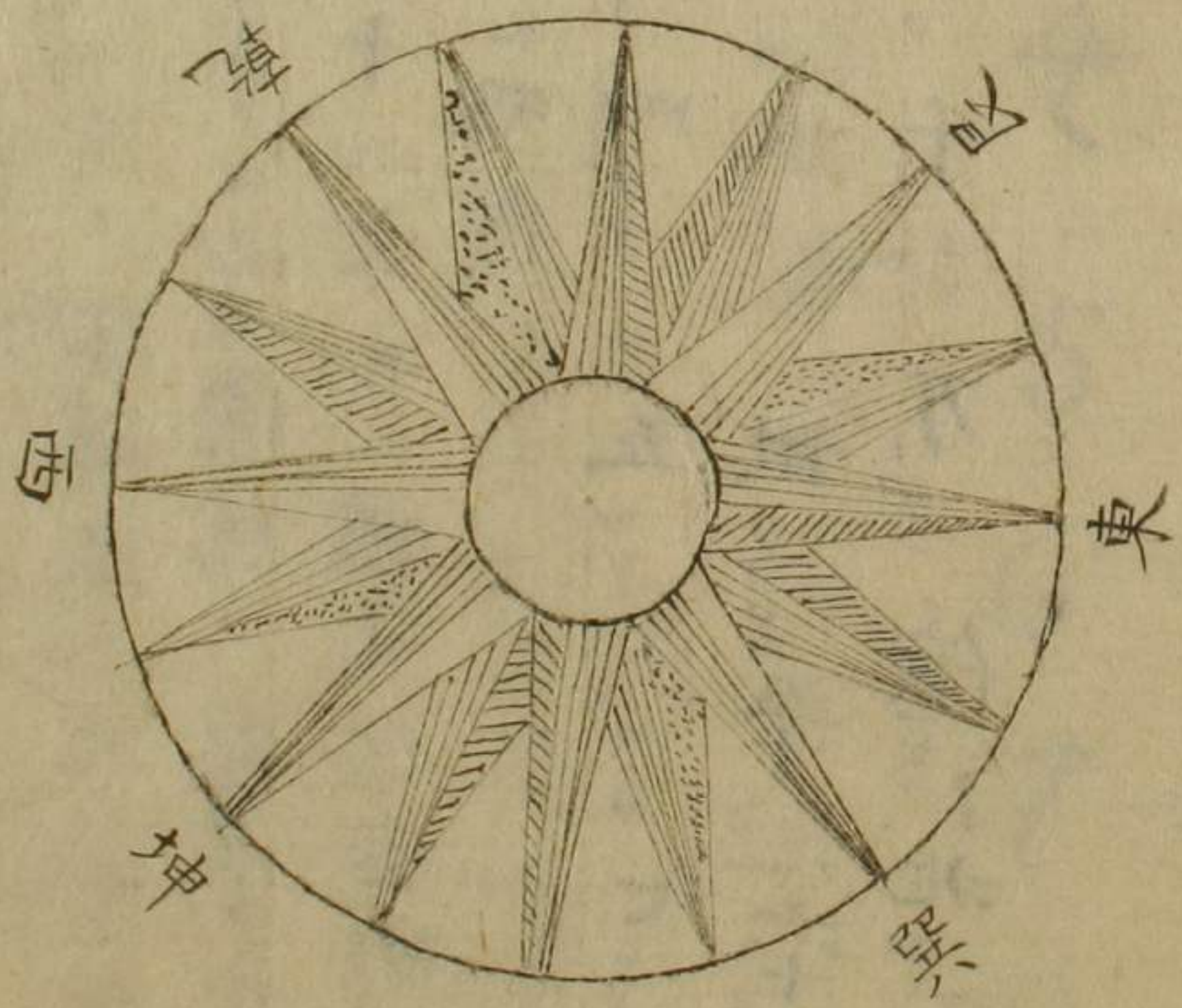
巽
シヨトス

艮
ノルトス

東
ストク

西
ガバク

フ



按蛮語ノ類恐クハ
傳寫ノ誤リアルベシ姑ク
舊ニ循フ右圖ハ彼人所持ノ針盤ノ圖ト見ユルナリ

魯西亞國字草體様ノ四十二字

按ニコ、ニ寫セルモノ字跡法ヲ失シ字音ニ片假名ヲ施セルモノモ必ス傳寫ノ誤リアルヘシ本編序例ニ三十二字并ニ體法字音共ニ詳説シタレハコ、ニ略ス

一 オリン オリ ニツア ニツ ニテリ ニテ 四セテリ セテ 五ペア ペア 六セロ セロ 七セム セム 八マセム マセ
 九 チエ 十 ケセ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ 卅 ツツ
 八十 シヤム 九十 ケエノスト 百 スト 千 チヤ 万 マン 億 セリ 兆 テリ 京 キョウ

IO、+ I-

2 = 3 = 4 = 5 = 6 = 7 = 8 = 9 =

右彼國字十數字ナリ

春 エスナ 夏 レート 秋 テセシ 冬 シユマ

梅ニ聖のちニニ
イノク、トモホ
ヤ、ク、誤、ハ
る、ニ、

正月 コルタ 二月 アペリ 三月 マイ 四月 イユニ
 五月 イヨリ 六月 アウクス 七月 セニキヤヒ 八月 ヲキキヤラリ
 九月 ノヤフリ 十月 チカフリ 十一月 エタワリ 十二月 ムウラリ

金カネ 銀ギン 銅ドウ 鉄テツ 刀鉄タウテツ 鍋鉄クハテツ 真鍮マニギ 錫シユク

鉛シロ 水銀スイギン 金赤銀キンセツギン 銀赤銅ギンセツドウ 唐真鍮錢カキ 錢カネ 人參サムサツバリ

桂枝ケイシ 木香モクキョウ 丁香コウキョウ 甘松カンシユ 樟腦カウノウ 甘草カンサツ 石膏シヨウコウ

雞冠石ケイコウシ 胡椒コウワ 芒硝マウシユ 鹽硝シユウタウ 明礬メイラン 真珠マウジュ 莫モク

大海紅タイカイコウ 松脂シュウジ 藿香クワキョウ

人馬ニウバ 牛熊ウシクマ 鹿鳥カクニ 家舟ケフネ 大小オウサイ 吉キチ

惡アク 昨クノ 今イマ 明アカシ 早サウ 行ユク 未マデ 遲オソク 見ミ 吸ヒキ 有アル

無ム 木キ 草ソウ 刀タウ 斧コ 山刀サンタウ 小刀コウタウ 鍋クハ 桶クワ 水スイ 湯ユ

服笠フクカサ 名ナ 云イフ 呼コエ 怪ホドク 恐オソク 危アヤシ 年ネン 月ゲツ 何ナニニ 持テ

寢ネ 起オキ 高タカ 主ヌシ 忝ハヅレ 久キウ 知チ 不知シラナク

スホホノリウ
スホエルノホータルステ

按蕃語類ハ聞違ハ一寫一誤リ何リとスル由本の
字ニテハ

享和元年辛酉秋九月八日寫 南亭山如

同年十有一月使穂積稻足寫焉

浣華井甘井

文化四年丁卯春三月中昇ヨリ借ッテ采女原ニ於
テ寫了

